



南東側俯瞰。
異なる高さの16枚の屋根が中庭を囲みながら旗竿状の敷地に広がる。



中庭を見る。
場所ごとに高さの異なる屋根形状が閉塞感を和らげ、まちの中の地形のように周囲の建物と連続する。



南西側外観。
周囲の空地から折り重なるファサードが断片的に見える。



リビングから中庭を。
中庭が建物全体へ光を配る。屋根と床の隙間を介して上下階が繋がる。



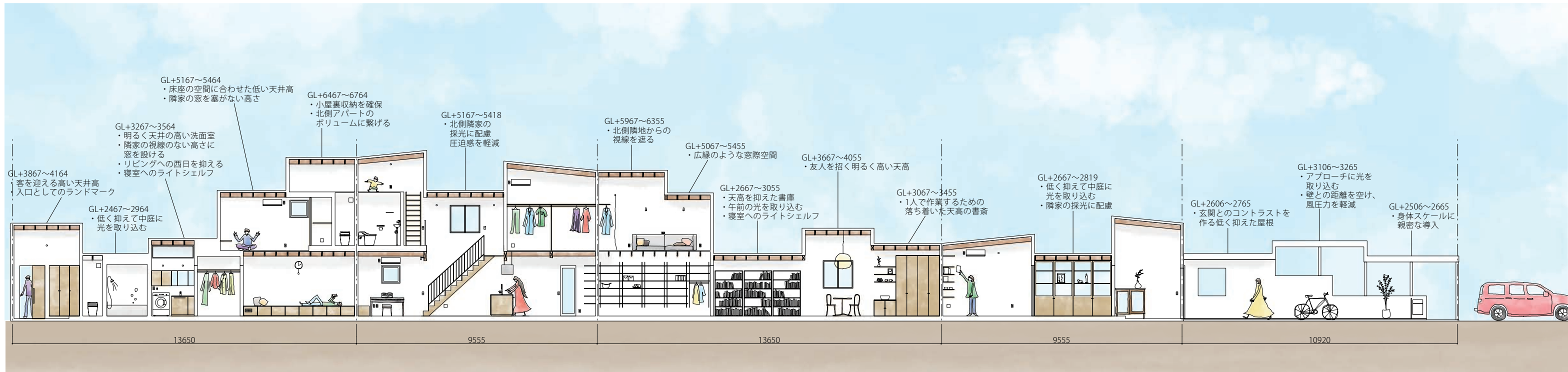
リビングを見る。
中庭越しに建物全体の様子がわかると同時に、周囲の街並みとも繋がる。

街区の中の家

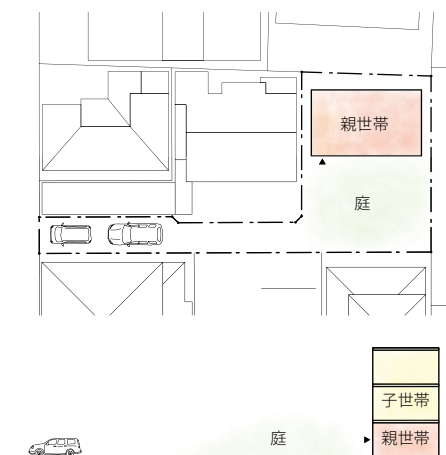
奥行き深い旗竿地に建つ、家族3人の住居と両親のための書斎を備えた住宅の計画。前面道路側から3軒目に当たる旗竿地で、かつては手前2軒と同様に、北側に寄せた2階建ての住宅が建っていた。街区の中央に位置することから、周りの住宅やアパートによる囲われと、駐車場の空地により、程よい親密感と抜けのある場所であった。

両親の書斎は、近隣にある自宅から通う離散的な仕事部屋であり、友人を呼んでお茶をする客間であり、自宅に収まりきらない本を収納する書庫でもある。また将来、書斎としての役目を終えた後には、子世帯の仕事部屋や子供部屋、楽器室など用途を変えていくことが想定される。限られた敷地の中で子世帯の生活空間と両親の書斎を階で分ける断面的にゾーニングでは、世帯間のコミュニケーションが取りづらく、将来の生活の変化にも対応しにくい。そこで選択的にアクセスできる平面的なゾーニングが良いと考えた。玄関から2方向に分岐した空間は、それぞれの居場所を経て対角側で合流し、円環状の体験となる。対角に共用空間を配置することでそれぞれの領域が滲み合う。結果的にできた中庭越しに建物全体の様子が窺い知れ、中庭が建物全体に自然光を配る。また円環状の空間は屋根の高さを変化させることで画一的な部屋の連続ではなく、洞窟のように気積を変化させながら連なり、場所の特性を増幅する。同時に、中庭越しに見える屋根並みが、建物に囲まれた街区の中のような、山並みに囲まれた盆地のような自然な親密感と抜けを作る。敷地の竿部分の、路地を進むような長さのある体験をそのまま旗部分に平面計画として巻き込み、敷地の周辺環境と呼応するように断面形状を決定していく。その屋根並みが連続するように前面道路へ向かって伸び、まちへと接続していく。

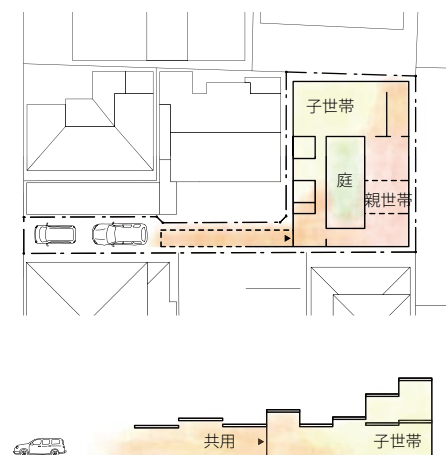
元々敷地にあった空間性が結晶化したような造形が、まちの空地に断片的に現れ、街区の中央に埋もれながらも、洞窟的な気積の変化と開放性を備えた暮らしをつくる。



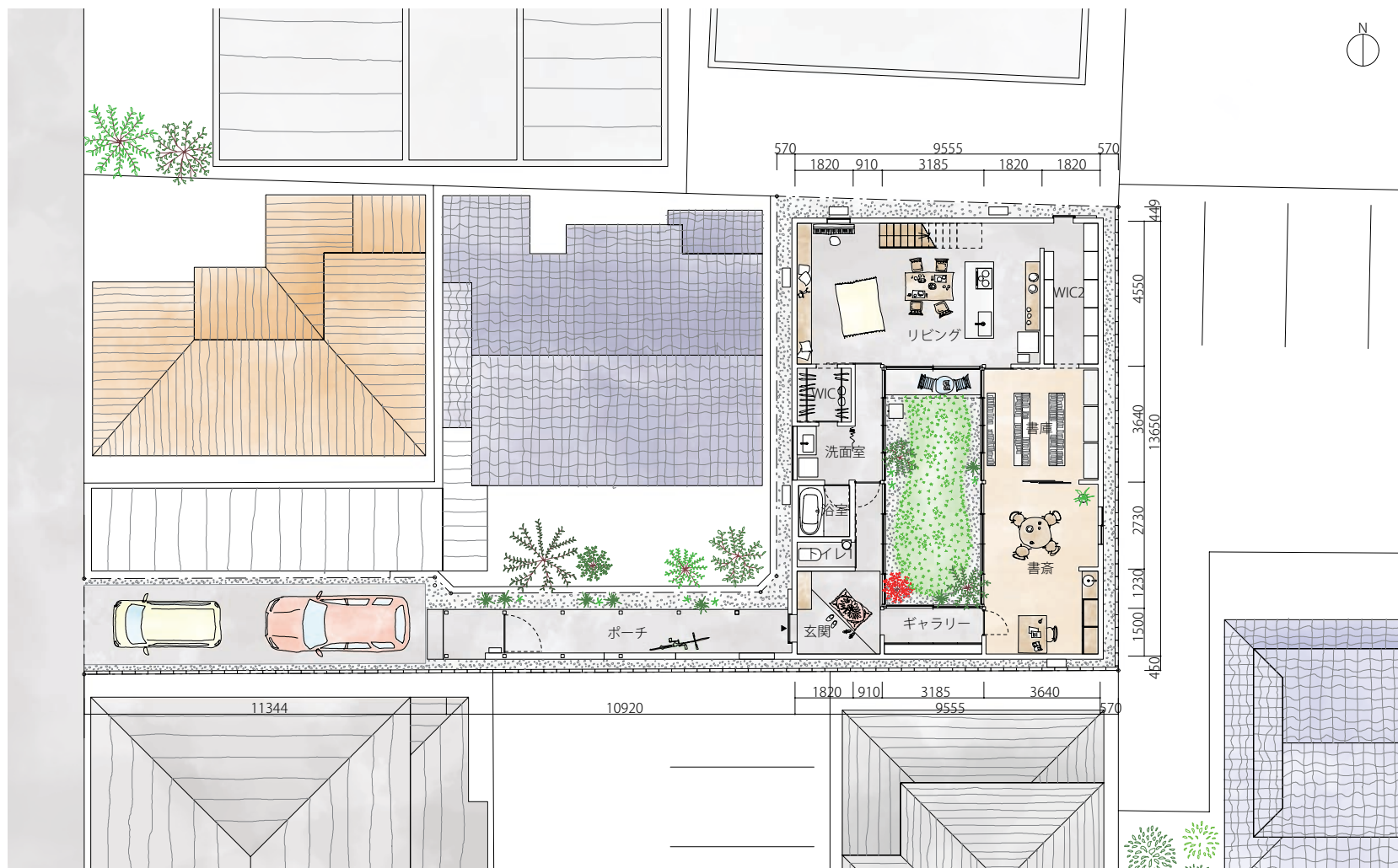
〈半二世帯的用途に応える円環状のゾーニングと外部への接続〉



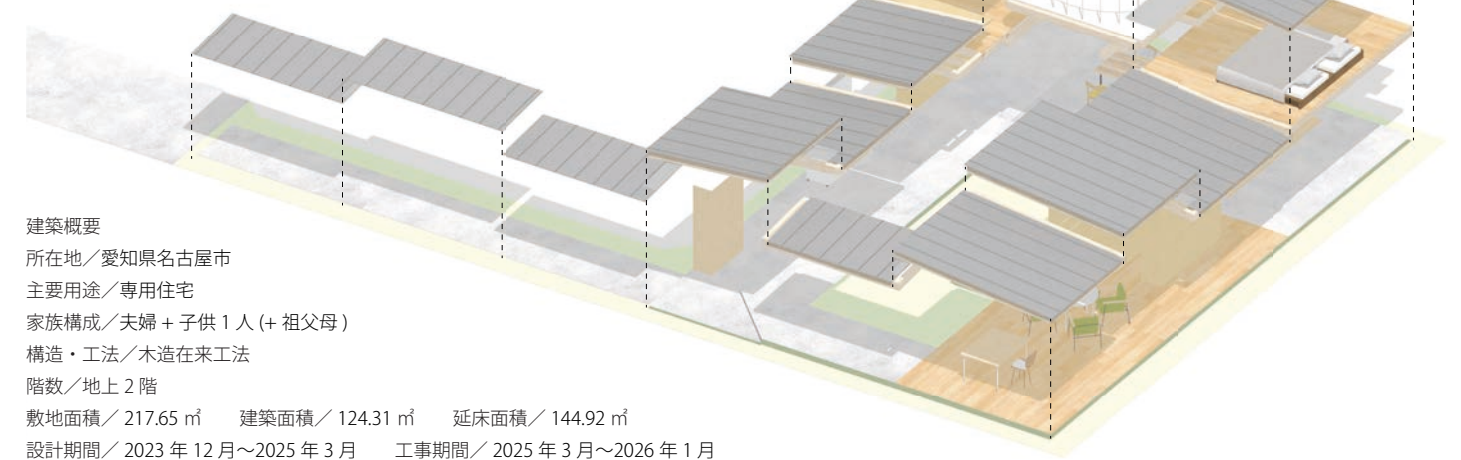
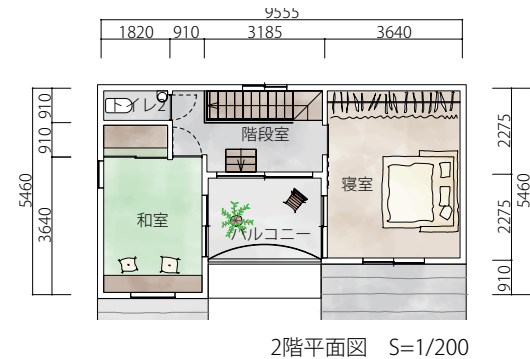
従来通り北側に寄せた配置とした場合、子世帯の居住空間と両親の書斎は階で分けられ、相互のコミュニケーションが取りづらい。庭は広く取れるが、仮に両親のアクセスを優先し1階を親世帯の書斎とすると、子世帯の生活は庭から離れてしまい、将来的に生活が変化した場合にも上階へ登って生活し続ける必要がある。



円環状の平屋に近い計画とした場合、アクセスの選択性生まれ、将来の変化にも対応しやすい。どの空間も庭と近くなり、前面道路に向かって屋根を伸ばすことで、まちと住宅内部の生活を接続する。また互いの領域の間に共用空間を配置することにより、生活が重なり合うことや空間を効率的に利用することも意図している。



配置+1階平面図 S=1/200



建築概要
所在地／愛知県名古屋市
主要用途／専用住宅
家族構成／夫婦＋子供1人（＋祖父母）
構造・工法／木造在来工法
階数／地上2階
敷地面積／217.65㎡ 建築面積／124.31㎡ 延床面積／144.92㎡
設計期間／2023年12月～2025年3月 工事期間／2025年3月～2026年1月